C'n
SCENE
NEWS
CHIBA CITY MUSEUM OF ART
vol. 8
'98年12月5日(土)〜'99年1月10日(日)
ただし、月曜日および2月28日(月)〜1月1日(金)は休館
草月とその時代1945—1970
初世河原蒼風《萬木千草》(1960)部分

解衣槃礴—アンフォルメルの思い出

逸品画家の奇抜な制作

「草月とその時代1945—1970」と題した今回の展覧会は、敗戦を契機に息を吹き返し華々しく展開された日本の前衛美術運動の一時期を回顧するものである。その最大のスポンサーは、みずからも前衛作家であった勅使河原蒼風氏と、かれの企画を資金面でバックアップするいけばな団体草月流の組織であった。オブジェ、アンフォルメルなど、新来の芸術用語を駆使する勅使河原氏のカリスマ的演出力に刺激され動員された日仏米の造型作家の顔ぶれが、いかに多彩なものであったかは、見てのとおりである。

私事になるが、日本が敗戦に打ちひしがれた1945年当時、私は中学一年だった。1970年には、私は38才。かの画期的？　な著書『奇想の系譜　又兵衛～国芳』を出した年にあたる。その間、前衛芸術の動きについては一傍観者にすぎなかった私だが、いまでも鮮やかに覚えているのは、1957年来日したジョルジュ・マチウのアクロバティックな制作ぶりを伝える写真である。「サイエッ」と気合いをかけ、長い画筆を槍のようにかざして、画面の前をかけめぐる浴衣掛けの姿は、なんとも異様で、かつ恰好よくみえた。

かれの仕事ぶりが話題になっていたころ、私の恩師にあたる米沢嘉圃先生が「こういった描き方は、中国のイッピンそっくりだ。だれかこのことにふれれば、もっと話題がひろがるのに…」とぼやいておられるのを耳にした。イッピンってなんだろう、と興味を持ってさっそく調べてみた。

イッピンとは逸品と書く。これは中国の唐王朝が滅びかけた8世紀の半ばから末にかけての頃にあらわれた水墨画の画法で、王墨、張志和（しか）、顧氏といった、江南出身の放浪画家がそれを行った。文献によると、見物が見守るなかで、かれらは酒を飲み、気分が乗ってきたところで、大きな絹地をひろげ、その中に入って描く。というより、笑ったり、歌ったり、踊ったりしながら大きな筆に墨をつけて絹地にふりそそぐ。ときには長く伸ばした髪を墨鉢に漬け、それを筆がわりにしてのパフォーマンスにおよぶ。そうするとそこに偶然できたような形が、後になって見ると、山になり、岩になり、雲や水になっている、というものだった。時には百人の楽隊つきでそれが行われたという。

片方は油絵具、片方は水墨。片方は抽象、片方は具象という差はあっても、アクロバティックなアクション・ペインティングという点で両者は規を一にする。大袈裟な見世物的性格は中国のほうが一枚上手である。中国では、これが後に、潑墨（はつぼく）という水墨画の重要な技法につながってゆく。

「解衣槃礴(かいいはんぱく）というむつかしい言葉が『荘子』に載る。むかし、ある皇帝が絵師を集めてコンクールをした。集まった絵師たちは、画板を受けとると定めの位置につき、絵筆を嘗めて待機している。一人、遅れてやってきて、ゆうゆうとして画板を受けとると、そのまま宿舎に帰ってしまった。使いをやって様子を見させると、「解衣槃礴」— 衣服を脱いで裸になり、両脚をなげだして行儀悪く座っています、との報告。皇帝はこれを聞いて、それこそ真の画家だとうなずいた — 紀元前6世紀の話である。世俗を忘れ心身をリラックスさせて“忘我”の境地に身を置かなければ、よい絵が描けないという事を、中国の知識人はかくも昔から知っていた。逸品画家の奇抜な制作ぶりも、同様な芸術認識に立っての演出だろう。マチウのパフォーマンスはその西洋現代版である。

「解衣槃礴」して描いたマチウの絵は、ほんとうに“忘我”の境地で描かれているか、展覧会で見るのが楽しみだ。

千葉市美術館　館長　辻　惟雄

勅使河原蒼風〈萬木千草〉1960年
墨、六曲一隻屏風／170・0×364・5cm　千葉市美術館蔵

トーキョーのアヴァンギャルド

1960年代の夜

「草月とその時代　1945―1970」は草月コレクション・現代美術部門の作品を中心に、国内に所蔵されている作品・資料、約370点の作品で構成されています。その出品作のうち海外作家の作品のおおくが、1945年以降のそれぞれの時期にヨーロッパ・アメリカの同時代の新しい美術潮流を日本がはじめて体験することになった作品そのものです。戦後美術の、小さなパノラマ。

日本の美術館や画廊が展覧会のために海外のアーティストを招き、その場で制作してもらうことが（その手続きのあいかわらずのめんどうくささは別として）ひんぱんに行われるようになった現在では想像しにくいことですが、1980年代なかばまでは海外（ヨーロッパ・アメリカ）作家の来日、あるいは展覧会そのものが「事件」だったのです。いわば、現代美術版「蘭学事始」。

ここでは、そのような時代と出品作品について理解の一助となる本を何冊かご紹介します。

※

まず、1986年に出版された東野芳明の『ロビンソン夫人と現代美術』（美術出版社）の「あとがき」から引用してみましょう。

…本書より20年前に出版された『現代美術 ― ポロック以後』という拙著がある（この本の第二部に当たるともいえる本書も、最初に考えていたタイトルは「現代美術ーステラ以後」だった）。この旧著も、『みづゑ』誌に60年代前半に連載したものが主になっているが、あの頃、つまりいまから20年前は、作家論を書いていても、どこか手ごたえのなさがつきまとったものである。登場する作家は、ポロックをはじめ、フォートリエからサム・フランシスまでの抽象系の作家と、デュシャン以降、ジョーンズからポップ・アートにいたる作家が主だが、手に入る資料は限られていたし、原作を日本で見る機会は少なかった。こちらは、外国旅行の度につとめて見た経験をもとに、図版を眺めながら、やっさもっさ書いた憶えがあるが、読者にどれ位通用するかとなると、いささか心許なかった。

しかし、それから20年、本書を書いているときは、手ごたえがずしりとあって、昔とはちがっていた。登場する作家にしても、彼ら、彼女らの展覧会やパフォーマンスをオーガナイズする日本の画商、美術館、プロモーターがふえたし、資料にしても、彼らを通して、かなり潤沢に手に入った。…

この「あとがき」の後半で東野氏は「旧著のあとがきで、フォートリエ、ジョーンズ、ラウシェンバーグ、ティンゲリーの4人の来日事件について、あんなにむきになって書いたのもご時世だったのだ」（傍点著者）とも回想しています。氏が語るとおり、『現代美術　ポロック以後 ―』（美術出版社・新版 1984）に収められているいくつかの文章は彼らの日本での活動をなまなましく伝えていますが、なかでも本展出品作であるジャスパー・ジョーンズの〈ウォッチマン〉（1964）制作課程を記録した「東京のJ・J（1964.5.1～6.29）」は貴重なドキュメント。昨年、東京都現代美術館で約20年ぶりに日本における大規模な回顧展が開催されたジョーンズですが、東野氏には他にもこの作家についての評論をまとめた『ジャスパー・ジョーンズ　アメリカ美術の原基』（美術出版社・増補版　1986）や、ジョーンズをはじめとしてフォートリエ、サム・フランシスなど本展の出品作家多数とさまざまな時期に対談やインタヴューをおこなった記録『つくり手たちとの時間 ― 現代芸術の冒険 ―』（岩波書店 1984）があり、一読をおすすめします。対談集であとがきがわりに記された巻末書き下ろし「戦後美術への旅」は抑制された語り口が印象的ですが、同様の戦後美術体験記としては大岡信の『抽象絵画への招待』（岩波新書　1985）の最終章「回想的エピローグ」あるいは作家論集『美をひらく扉』（講談社　1992）なども参考となるでしょう。

さて、カルヴィン・トムキンスの『花嫁と独身者たち ― 現代芸術五人の巨匠』（美術出版社　1972）はジョーンズとも縁が深い5人のアーティスト（マルセル・デュシャン、ジョン・ケージ、ジャン・ティンゲリー、ロバート・ラウシェンバーグ、マース・カニングハム）の評伝です。筆者が「ニューヨーカー」誌のスタッフ・ライターだったこともあり、現代美術のエッセイでありながら読みやすい内容になっています。この書籍は現在入手困難ですが、興味のある方は古本屋で捜して見て下さい。

訳者のひとり中原祐介は「訳者あとがきー『独身者』たちの後日譚」のなかで「デュシャンを除く4人は偶然にも来日の経験のあることで共通している」と記していますが、たとえば、トムキンスはケージについての文章をつぎのようにはじめています。

1962年の秋のある午後、日本での6週間の演奏旅行も終りに近づいたアメリカの作曲家ジョン・ケージとピアニストのデイヴィッド・テュードアは、名古屋市の南約70マイルの海岸近くにある伊勢の大神宮で彼らのための特別なお祓いの儀式に参列した。そのお祓いは、彼らの接待主である裕福な日本の芸術の保護者、華道の家元である勅使河原蒼風氏が依頼し、その費用でまかなわれたもので、古来からのしきたりである雅楽の音楽と舞いが盛り込まれていた。その儀式の目的は、蒼風氏に依頼された神主の祝詞に述べられていたように、ケージ氏並びにテ

1964年5月23日　草月会館ホールの聴衆たち（写真提供：財団法人草月会資料室）
この日、"Collective Music"が開催され、叙雲啓示（ジョン・ケージ）・（柳慧・小杉武久・武満徹の作品が上演された。

ュードア氏の前衛芸術運動に祝福をを与え、花ひらいている世界中のこのような前衛芸術運動のすべてに太陽の恵みをもたらすことにあった。

そのためかあるいはたまたま合致したせいかどうか、国際的な前衛芸術運動はそれ以来いっそう活発になったようにみえ、多くの国々においてにぎやかな騒動を起したり、ブルジョアたちを驚かせたりしている。…

この年、つまり1962年に草月アートセンターの招きで来日したケージが草月ホールをはじめ各地で開催したコンサートは「ジョン・ケージ・ショック」という言葉が生まれるほど音楽関係者をはじめとする日本の聴衆に大きな衝撃を与えました。彼はまた、アートセンターが64年に招いたカニングハムの舞踏団の音楽監督として参加しています。当時、舞踏団の美術・照明監督だった人物がラウシェンバーグ。今回出品されている彼の〈ゴールド・スタンダード〉(1964) はこの来日のおりに草月ホールで開催されたアーティストへの公開質問会の最中に公開制作された作品です（さきにあげた東野氏の対談集にはこの直後、銀座のバーでおこなった対談が収録されています)。

※

つづいて、1970年代から80年代にかけての動向から、いくつか。

1970年代ともなると、海外作家の来日による衝撃、などというできごとは、70年に大阪・千里丘陵で開かれた日本万国博覧会で各国からアーティストが現地制作のため同時に多数来日したのでいったんは鎮静化したようにも思われました。が、74年に来日したアンディ・ウォーホルのばあいは美術界、というよりもマスコミが「美術家というより有名ロック・スターの来日を思わせる扱い」(帯金章郎「神話と批評　日本におけるウォーホル受容史」『アンディ・ウォーホル　1956—86：時代の鏡』図録　東京都現代美術館ほか 1996) でした。この来日をきっかけとして制作された《勅使河原蒼風》(1975)・《勅使河原霞》(1976) は日本人を描いた肖像画としては代表的なものといえるでしょう。70年代にテレビを中心としたマスコミが来日した美術界のアーティストや作品で大騒ぎしたのはこのウォーホルの時と、そしてほぼ同時期にやってきた〈モナ・リザ〉ではなかったかと記憶しています。

このような騒ぎとはまったく対照的だったのが1981年に軽井沢の高輪美術館などで開催されたマルセル・デュシャン展でした。こちらは、静かな熱気によって迎えられた展覧会。すでに60年代の来日するアーティストたちの背後に見え隠れし、画廊でさ

さやかながら断片的に紹介され続けていたデュシャン。彼の作品たちは、あるいはもっとも来日が待たれていたものだったのかもしれません。

さきに紹介したトムキンスの本をもとに考えてみると、ジョーンズをはじめ、1960年代に来日した主なアーティストはその造形思考においてマルセル・デュシャンとなんらかのかかわりがある作家でした。この、来日しなかった「独身者」については今年刊行された『美術手帖』8月号の特集「マルセル・デュシャン　20世紀最終案内」が現在入手可能な文献目録を備えたハンディな入門書といえるでしょう。もっとも、編集する視点と構成の卓抜さにおいて同誌81年8月号のほうが勝っているかもしれない。なぜなら執筆陣のユニークさとともに、この号ではデュシャンをかなり早い時期に認め、交流のあった瀧口修造をあわせて特集しているからです。瀧口氏もまた、勅使河原蒼風との交流やアートセンターにおける「目撃者」のひとりとして草月とはかかわりのある存在でした。

このデュシャン（あるいはタキグチ）をめぐるひとりの「受け手」の記録として鍵谷幸信『サティ　ケージ　デュシャン　反芸術の透視図』（小沢書店　1984）をあげておきます。そのなかの「晴れのち曇りのオーダーメイド」は肩の凝らない文章で綴られた興味ぶかい一編。1960年代に草月アートセンターにかかわりのあったひとびとの70年代後半の活動をかいま見ることができますし、鍵谷氏のエッセイの文体じたいが氏と交流のあった「J・Jおじさん」こと植草甚一のそれと結びつくものだから、どこか草月アートセンターが発行していた『SACジャーナル』の記事のつづきを読んでいるような感じがします。

植草氏、といえば今回は美術に限った紹介のために映画・音楽関連のものは割愛していますが、かつて晶文社が出版していた『植草甚一スクラップ・ブック』は古本屋で見つけたらどの巻でもいいからおさえておきたい本、とだけいっておきます。いま、コンビニエンス・ストアなどで売っている『宝島』のもともとは植草氏が編集して晶文社が出していた“Wonderland”だった、なんてことは知っているひとがおおいでしょう（—と、ここまで記していたところ、昨晩、植草氏と無二の親友だった淀川長治さんがおなくなりになられました。ご冥福をお祈りします）。この方面で意外と忘れられているのが武市好古。この人のものは今となっては古本屋ですら見つからないけれど、フレッド・アステアなんかのことを書かせたらすごく面白かったのに。厭味のない久保田二郎みたいだなー、と思いながら読んだことを記憶しています。余談ついでに書いておくと、若き日の武市氏が居候としてころがりこんだ先がこれまでたびたび著作を紹介した東野氏の自宅。そこで本棚にあった本を勝手に読んでいるうちにトリコになったのが石川淳の著作でした。そういえば石川氏が花田清輝をはじめとする後の世代に潜在的に与えた影響、みたいなものを考えてみると、瀧口修造が果たした役割とは別のところで、これまで紹介した海外からやってくるアーティストたちを受けとめる「こちら側」の支点になっていたのではないでしょうか？　この問題については、また、改めて。

さいごに、もう一冊。

今回の展覧会図録にも再録させていただきましたが、秋山邦晴氏の「草月アート・センター」が収められた『文化の仕掛人　現代文化の磁場と透視図』（1985）は書名どおり、1945年以降、この国の文化状況に大きな影響を与えた場所・集団・雑誌について検証したものです。現代美術、とりわけさきにあげた海外のアーティストたちの作品をだれが、どのように紹介していたかについては、同書の東野芳明「南画廊」および村上紀史郎による海藤日出男へのインタヴューをお読みください。とくに後者は1948年から68年まで読売新聞社の文化部次長をつとめ、グループ「実験工房」結成のきっかけをつくったことをはじめとして数多くの美術の「現場」を支え・目撃した海藤氏が遺した（ほとんど唯一の）メモワールです。

※

いま、このつたない文章を綴るためにそれぞれの書籍を読み返してみたのですが、海外作家の来日や展覧会それじたいが「事件」となった時代がどのくらい続いていたか、を考えてみると、それは1980年代のなかばまでだったでしょう。

具体的には、西武美術館（現・セゾン美術館）の個展のために来日したヨゼフ・ボイスのばあいがその最後をかざるできごととして位置づけることができます。

滞在期間は1984年5月29日から6月5日までの一週間。

彼の来日は、1950年代におけるフォートリエやマチウ、60年代のティンゲリーやジョーンズ、70年代のウォーホルのそれを思い出させるものでした。到着直後の記者会見と翌日の朝日ホールでの講演会。それらと並行してなされた展覧会の準備。6月2日の午前中にはさまざまな曲折を経て東京藝術大学で開催された学生たちによる「対話集会」があり、その日の午後6時、やはり同じ時期に東京都美術館での個展のために来日していたナムジュン・パイクと共に草月ホールの舞台でアクション（2台のピアノによるコンサート・パフォーマンス）をおこないました。

ケージ、テュードア、高橋悠治、一柳慧が弾いた赤いベーゼンドルファーを前にしながらコヨーテの吠え声を連想させるようなボイスのアクション。もう一台のピアノを弾くパイク。その日、草月ホールに集まった聴衆たちは世代やファッションが違っていても、たしかに20年前のラウシェンバーグの公開質問会に集まっていたひとびとと同じだったように思います。1時間ほどのアクションの後、目覚まし時計のベルが鳴り、終了。

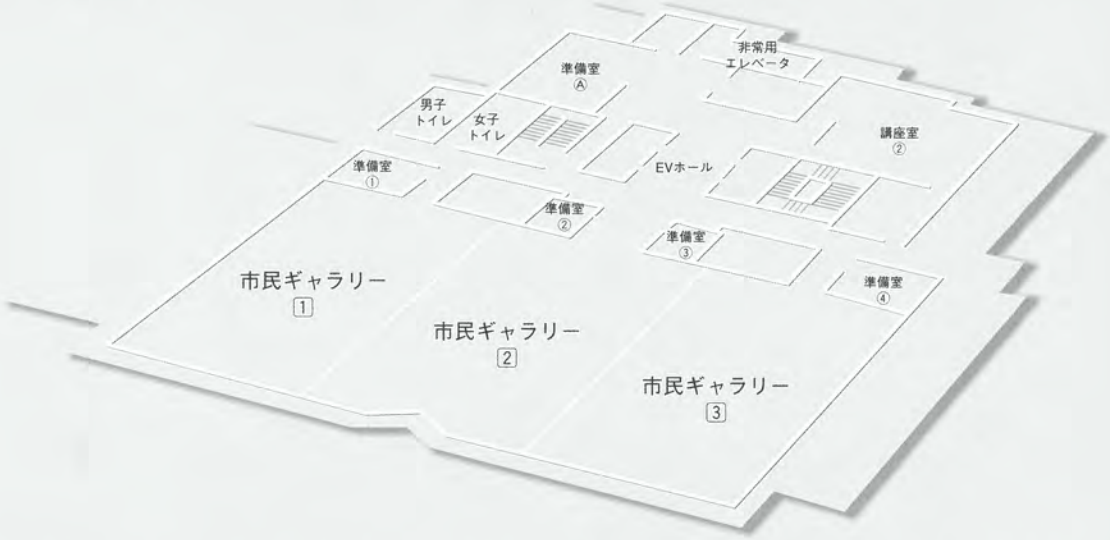
ベルが鳴りやんでから今日まで、ふりかえってみると、だいぶ時間がたっていますが、どうも、同じような「事件」はおこっていないようです。あの夜を境にひとつの時代がおわった。いまとなっては、そう言ってもいいんじゃないか。

あの夜のできごとが、「草月ホール」という場所で、1960年代の前衛運動体であるフルクサスに参加していたふたりのアーティストによって行われたことは、いささかでき過ぎたはなしではあります。

（本館学芸員　藁科英也）

市民ギャラリーご利用の案内

9階の市民ギャラリーは、市内で活動する美術団体の方々に作品を発表していただくスペースです。



市民ギャラリーは1・2・3の三室に分かれ、それぞれが絵画をはじめとして、彫刻や工芸、写真など多様な展示に対応しています。
また、三室を合わせ、ひとつの大きな空間として利用することが出来ます。

12月27日（日）まで、1999年4月～9月までの利用を受け付けます。

[利用時間] 10：00～18：00（金曜日のみ20：00まで）
[休 館 日] 月曜日及び年末年始

※ご利用の際の手続きなど、詳しくは美術館までお問い合わせください。

展 示 室	床 面 積	壁 面 延 長	壁 面 高
市民ギャラリー1	162.0㎡	49.0m	3.0m
市民ギャラリー2	136.7㎡	37.6m	3.0m
市民ギャラリー3	162.0㎡	49.0m	3.0m

「友の会」ご入会の案内

企画展・常設展の入場はフリー、図書の割引などの特典がございます。是非ご利用ください。

〈入会金〉

一般会員…… 1,000円
学生会員（高・専・大）…… 500円
ファミリー会員（大人2名と中学生以下の家族）…… 2,000円

〈年会費〉

一般会員…… 3,000円
学生会員（高・専・大）…… 1,500円
ファミリー会員（大人2名と中学生以下の家族）…… 6,000円

【入会のお申込み】

●美術館受付けに備えてある「入会申込み書」を利用し、お申し込みください。
●休館日（臨時を含む）や年末年始は、お申し込みできません。
※詳細は、千葉市美術館（TEL 043－221－2311）までお問い合わせください。

ミュージアム・グッズから

美術館所蔵の作品がTシャツになりました。図柄は熱帯魚好きには見逃せない吉田博の「ホノルル水族館」とちょっとアナーキーな立石紘一の「ハン」で、価格は2,000円サイズはMとLがあります。

吉田　博〈ホノルル水族館〉（左）／立石紘一〈ハン〉（右）

展覧会スケジュール

［休　館　日］月曜日（祝日の場合はその翌日）　年末年始　展示替期間中
［開 館 時 間］午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）毎週金曜日は午後8時まで（入場は午後7時30分まで）
［ハローダイヤル］043-227-8600

▲勅使河原宏《サイレン島》1951年／油彩、カンバス／130.6×161.9cm　草月美術館蔵

▶岡本太郎《憂愁》1947年／油彩、カンバス／100.0×65.0cm　草月美術館蔵

草月とその時代 1945—1970

12月5日㊏～1999年1月10日㊐
ただし12月28日(月)～1月4日(月)は年末・年始のため休館

本展では、初代草月流家元である勅使河原蒼風（1900～79）と、その精神を引き継いだ現在の三代目家元、勅使河原宏（1927生）を軸とする草月流の活動を通じて戦後日本の現代美術のあゆみをたどろうとするものです。ふたりが幅広いジャンルのアーティストたちと親交を結び、その課程で収集された作品群は国内の現代美術コレクションのなかでも高い水準を誇ります。今回は、草月流の全面的な協力により、草月美術館の現代美術部門の作品および国内所蔵の関連作品・資料約370点を基に「草月」によってリードされた戦後における前衛の全体像を紹介します。

なお会期中、12月13日・20日（各日曜）には、11階講堂で「草月アートセンター（通称SAC）」で上映された実験映画のかずかずを上映します。

千葉市美術館所蔵名品展

冬日和の美術—清冽のリリシズム

1999年1月16日㊏～2月14日㊐

第30回記念千葉市民美術展覧会

1999年2月27日㊏～3月19日㊎

馬頭町蔵　青木コレクション展

—広重の肉筆画と川村清雄を中心に—（仮称）

1999年3月30日㊋～5月9日㊐（予定）

■展覧会の日程・名称は変更される場合があります。なお、企画展の入場料は展覧会ごとに異なります。詳しくは美術館までお問い合せください。

美術館の所蔵作品より

岡田米山人（1744～1820）《竹林七賢図》　文化5年（1808）
紙本墨画　一幅／43.0×58.7cm

米山人（べいさんじん）という画名は、この画家が30代の頃米屋を営んでいたことに由来する。米を商いながら、またその後藤堂藩大坂蔵屋敷に仕えるようになっても、仕事の傍ら漢詩や書画に親しみ、独学で文人画家への道を開いたのである。本格的な作画活動は晩年に至ってのことで、比較的制作年の早い方であるこの作品も、65才の時の筆になる。

なんとも不格好な山の麓に庵があり、そのまわりを飄々と伸びた竹の林が囲んでいる。よく見ると楚々とした筆で人物がところどころに描かれており、竹林の中に半身だけのぞかせているような人物を含めてこの画面には総勢10人を確認することができる。このうち同じような服装をして琴をひいたり、寝そべったり、茶をたてたり、竹林を散歩したりという7人が「七賢人」というわけである。俗世間を避け竹林に集まったという中国の7人の隠者の話は、画題として大変好まれていた。

上部の漢文には、中国の画をもとにして米山人なりの画風でこれを描いたということが記されている。決して筆の巧みとは言えないのだが、淡墨を多用した素直な筆のタッチが好ましい。山らしくもない山、竹らしくもない竹であるのに、奔放でユーモラスな画風が、捨てがたい味わいを出している。

実はこの画家の創作意欲は75才からの2年にピークに達している。筆はより奔放に鋭くなり、ときにあくどいと感じさせるほどのエネルギッシュな作品を次々に描き出したのである。老いるほどにエネルギーを増した画家というのも多くはあるまい。おそらくこの画家にとって絵を描くということは、徹底的に自分と向き合うことであったのだろう。どんな風に米山人の思いが立ちあらわれるか、作品としばし向き合ってみたい。

※1999年1月16日～2月14日の「千葉市美術館所蔵名品展　冬日和の美術－清洲のリリシズム」に出品の予定です。

（本館学芸員　田辺昌子）

美術館ご利用あんない

1-2階 SAYA-DO HALL さや堂ホール
昭和初期に建設された、市内に残る数少ない貴重な建物（ネオ・ルネサンス様式）を新しい建物で包み込み、復元・保存したものです。

1階 MUSEUM SHOP ミュージアム・ショップ
展覧会カタログ・美術図書、ミュージアムグッズがお求めになれます。

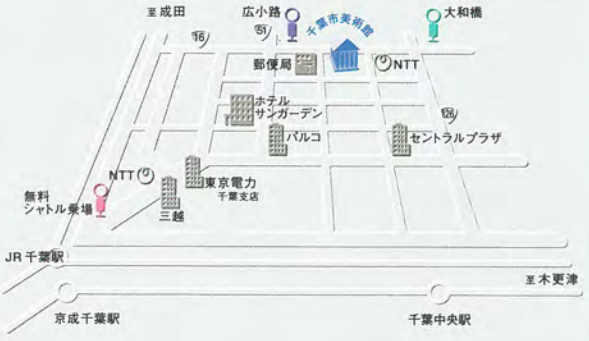
7階 AV CORNER 映像コーナー
ハイビジョンによる作品鑑賞、所蔵作品の検索ができます。また、千葉市美術館制作の番組をご覧頂けます。

10階 ART LIBRARY 図書室
室内の美術図書はご自由にご覧になれます。また、美術書の検索に関するご相談をうけたまわります。
[開室時間] 10:00～18:00

11階 RESTAURANT レストラン
ランチタイム・喫茶にご利用下さい。
[営業時間] 11:00～21:00

●JR東日本千葉駅利用
東口より徒歩15分　京成バス大学病院行（のりば⑦）「大和橋」下車徒歩2分
京成バス矢作台市営住宅・川戸行（のりば⑦）または小湊バス八幡宿駅行（のりば④）「広小路」下車徒歩1分　無料巡回シャトルバス・チーバス（のりば⑲）「中央区役所・美術館前」下車11：00～18：00の毎時05分と35分に発車（水曜日運休）

●京成電鉄千葉中央駅利用
東口より徒歩約10分



千葉市美術館
Chiba City Museum of Art
〒260-8733 千葉県千葉市中央区中央3-10-8　発行日:1998年12月10日
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
[ご案内]NTTハローダイヤル 043-227-8600
Publication: 3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba city, Chiba pref. Japan zip.260-8733
制作・印刷：㈱翠松堂